

アジア経済と日本の中小企業： 学際性・実証性・政策志向の研究

金城学院大学名誉教授 足立文彦

(インタビュアー) 弘中史子

中京大学総合政策学部教授



足立文彦 (あだち ふみひこ)

1946年三重県生まれ。金城学院大学名誉教授。1965年一橋大学経済学部に入學、学部在學中に1年間アメリカのブランダイス大学に留學、その後大学院に進學し1976年に一橋大学経済学研究科博士後期課程を単位取得満期退學。1976年より南山大学経済学部専任講師・助教授、1989年より名古屋大学経済学部助教授（1991年より1996年まで同大学大学院国際開発研究科助教授を併任）。1997年より金城学院大学現代文化学部教授となり、国際交流センター長、教務部長、学部長を歴任し、2015年に定年退職。専攻は開発経済学、アジア経済論。退職後はアジア各国の高等教育機関をまわり、英語によるボランティア講義を行っている。

弘中史子（以下、弘中） 本日は中小企業の著名な研究者へのインタビュー企画第3回として、足立文彦先生にお越しいただきました。

私が東南アジアで調査をしたり長期滞在したりする上で、足立先生からはこれまでたくさんのご助言をいただけてきました。ですから、このような機会をいただき光栄に思っております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

足立文彦（以下、足立） よろしく願いいたします。

1 アメリカへの留学とアジアへの関心

弘中 進学先になぜ一橋大学を選んだのでしょうか。

足立 当時、近代経済学に関心を持っていたからです。近代経済学が盛んな大学の中でも、一橋大学は中山伊知郎氏¹や都留重人氏²など政策提言する言論人としての活躍が目立っていて、その校風にひかれました。

1 なかやま いちろう（1898年-1980年）。元一橋大学教授、元学長。シュンペーターの研究で知られ、『純粋経済学』（岩波書店）などの著作がある。

2 つる しげと（1912年-2006年）。元一橋大学教授、元学長。最初の『経済白書』（1947）を執筆したほか、『公害の政治経済学』（岩波書店）などの著作がある。

弘中 どのような大学生活でしたか。

足立 部活は一時期サッカー部、小平祭（教養課程の大学祭）準備委員もしており、その後、留学を念頭にAIESEC（国際経済商学学生協会）に注力しました。

弘中 大学で印象に残っている授業はありますか。

足立 教養課程では3人の素晴らしい英語の師に出会いました。岩田一男先生³からは、「将来世界で活躍するビジネスマンになるのであれば、聖書・イソップ物語・ギリシャ神話は読んでおけ」と指導を受けました。欧米人の生活の背景を理解できるというのです。多くの英語の参考書を執筆し、名著『和文英訳の修業』が現代も読みつがれている佐々木高政先生⁴、新進気鋭の河村錠一郎先生⁵にもご指導を受けました。

弘中 ゼミはいかがでしたか。

足立 3年生のとき、坂本二郎先生⁶のゼミにはいりました。ゼミの選抜で「何でもいいから経済学の古典の書評を400字50枚で書け」といわれて、シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』⁷を選びました。3年の時は、先生が指定した新書を3冊読んで毎月30枚ずつまとめて発表しました。ゼミを通して書くと



いうことを徹底して鍛えられました。

坂本先生は当時、三鷹市（後に西荻窪）のご自宅でゼミをなさっており、先生のお子さんの世話をして遊んだり、まるで書生のような体験もしました。

弘中 アメリカに留学したのは学部在学中ですね。

足立 大学4年生（1968-69年）のときに、サンケイ・スカラシップ⁸を得て、アメリカのブランダイス大学⁹に留学しました。当時日本では「受験地獄」という言葉があり、受験時は一生懸命勉強するものの、入学後は勉強しないという風潮がありました。ブランダイス大学はユダヤ系の比較的新しい大学でしたが、学生たちは一流の大学院をめざすために必死で勉強しており、大いに刺激を受けました。平日の図書館は満席です。金曜の夜と土曜日が息抜きで、日曜日の午後からは翌週の予習をする学生で再びい

3 いわた かずお（1910年-1977年）。元一橋大学教授で英語を担当していた。ステイーヴンソン研究で知られる一方で、『英語に強くなる本』（ちくま文庫）をはじめ数多くの受験参考書の著作がある。

4 ささき たかまさ（1914年-2008年）。元一橋大学教授で英語を担当していた。『英文構成法』『英文解釈考』（金子書房）など受験参考書の著作がある。

5 かむむら じょういちろう（1936年-）。元一橋大学教授で英語を担当していた。『ピアズリーと世紀末』（青土社）などの著作がある。

6 さかもと じろう（1928年-1985年）。元一橋大学教授。経済発展論を担当。1970年に一橋大学を退官。『知識産業革命—脱工業化社会への転換』（ダイヤモンド社）などの著作がある。

7 Schumpeter, J.A. (1942) *Capitalism, Socialism and Democracy*, (Harper and Brothers) (中山伊知郎・東畑精一翻訳 (1995)『新装版 資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社)

8 産経新聞、フジテレビなどにより設立された海外留学を支援する法人。1964年から1989年まで、大学生を海外留学に派遣していた。

9 アメリカのマサチューセッツ州ウォルサムにあるユダヤ教徒によって1948年に設立された大学。

っぱいになります。

またアメリカの大学では、当時日本にはなかったシラバスやリーディング・リスト、学生による授業評価など、教育の質の高さを維持する仕組みが確立されていることにも驚きました。この経験は、後に教育者になったときに役立ちました。

弘中 留学中に各地で見聞をひろげられたようですね。

足立 ニューヨーク市役所でのインターンシップを体験し、その後、アメリカの各州をバスで2ヶ月にわたって回り、さらにヨーロッパを鉄道で3ヶ月周遊するなど、大変充実した留学生活でした。

留学の帰途は、南回りでインド、タイ、香港を経由して旅をしながら帰国しました。この時の経験が「日本はもっとアジアに関心を持つべきだ」と考えるようになったきっかけです。アメリカでは支援すべき開発途上地域として近隣の中南米が、ヨーロッパではアフリカや中近東が意識されていました。そうだとしたら日本はもっとアジアを知らなければ考えたのです。

2 大学院進学と研究者への道

弘中 帰国後のゼミはいかがでしたか。

足立 私の留学中に坂本先生は、学生運動などを批判して一橋大学を退職なさいました。そのため、坂本先生の兄弟子だった板垣與一先

生¹⁰が受けいれてくれました。そこで「都市の社会経済学的研究（ニューヨーク大都市圏の研究を中心として）」という卒業論文を書きました。「私は留学で卒業が2年遅れたから、他の学生の3倍書きます」と約束し、通常の学生の3倍（坂本ゼミの内規は400字300枚以上）、つまり400字1000枚の長編論文を完成させました。

弘中 当時、すでに大学院に進学することは決意していたのでしょうか。

足立 留学からの帰国時に、大学院にいきたいという気持ちは固まっていました。しかし板垣先生は定年退官のため、大学院進学後は指導していただくことができませんでした。そこで大学院では石川滋先生¹¹のゼミに進みました。つまり私には3人の恩師がいます。坂本先生か



10 いたがき よいち（1908年-2003年）。元一橋大学教授。経済政策・国際政治が専門。『アジアの民族主義と経済発展：東南アジア近代化の起点』（東洋経済新報社）などの著作がある。

11 いしかわ しげる（1918年-2014年）。元一橋大学教授。開発経済学が専門。『Economic Development in Asian Perspective』（Kinokuniya Bookstore）などの著作がある。

らは「人生への情熱」、板垣先生からは「学生への愛情」、石川先生からは「学問への真摯」を学びました。

弘中 大学院ではどのような研究をなさいましたか。

足立 引き続き都市問題に興味を抱き、博士課程修了論文のタイトルは「経済発展と都市化の研究：産業の地域的集中を契機とする都市化過程の一考察」でした。長野県の岡谷市を中心とする製糸業都市の生成・発展の研究です。そこから途上国の都市化へと関心が広がり、内発的発展も視野にいれるようになりました。対照的な外発的発展の事例として、たとえば民間企業を中心に発展した茨城県日立市、官営企業を中心に成長した福岡県八幡市についても補論的な考察を行いました。

大学院時代は海外に渡航する機会には恵まなかったのですが、留学生と親交を深めチューター¹²もしていました。当時の大学教員は、板書を楷書ではなく草書で書く方も多く、留学生は解説にとっても苦労していたのです。私のノートは読みやすいと好評でした。彼・彼女たちとは今でも交流が続いています。

3 フィールドワークの経験と タイでの長期在外研修

弘中 博士課程で学んだ後に、南山大学で最

初の教員生活を送られますね。

足立 当時の学長であったヨハネス・ヒルシュマイヤー先生¹³は、開発経済学と経営発展論をご自分で講義なさっていましたが、これらの科目を若い人たちに委ねたいということで、私がその一人として採用されました。経営発展論では和田一夫先生¹⁴が赴任しました。南山大学の系列校で中学・高校を過ごしたので、校風も知っており、居心地の良さがありました。

弘中 研究ではどのような進展があったのでしょうか。

足立 この時期はいくつかの大きなプロジェクトに取り組みました。第一は、石川滋先生・尾高煌之助先生¹⁵・小野桂之介先生¹⁶との「東南アジア諸国の自動車国産化計画の比較研究」です。まだ、日本の自動車産業が世界で着目される前の時代でした。先生たちと一緒にフィールドワークをすると、その日うちに記録をまとめた上で読み合わせをするのです。メンバーの予備知識や主観によって解釈が異なるので、すり合わせは重要です。これは大変勉強になりました。

第二が繊維産業ビジョンのプロジェクトで、名古屋大学の瀧澤菊太郎先生¹⁷からの誘いでした。当時の日本は、途上国からの繊維製品の輸入の脅威にさらされながらも、特殊で高付加価値な繊維製品を欧米に輸出していたのです。つまり輸出と輸入の両面から産業ビジョンを作ら

12 学習に関する助言等を行い、留学生が日本語で書いた論文を添削する。

13 Johannes Hirschmeier (1921-1983)。元南山大学学長。ドイツ出身で、アメリカのハーバード大学で博士号を取得。開発経済、比較経営が専門。

14 わだ かずお (1949年-)。元東京大学教授。専門は比較経営史。『ものづくりの寓話：フォードからトヨタへ』(名古屋大学出版会)などの著作がある。

15 おだか こうのすけ (1935年-)。元一橋大学教授。専門は労働経済学。『職人の世界・工場の世界』(リプロポート)などの著作がある。

16 おの けいのすけ (1940年-)。元慶應義塾大学教授。専門は経営学。『ミッション経営の時代—社会的使命が企業を高める』(東洋経済新報社)などの著作がある。

17 たきざわ きくたろう (1926年-2002年)。元名古屋大学教授。専門は工業経済。『高度成長と企業成長—中小企業から大企業への成長の実証的研究』(東洋経済新報社)などの著作がある。

なければなりませんでした。先進国と途上国を2つのチームにわかれて回ることになり、私は先進国調査チームの一員になりました。先進国である欧米繊維・衣服産業調査の団長は、一橋大学の山澤逸平先生¹⁸でした。

調査には2ヶ月ほどかかり、そのうちの1ヶ月は調査団の準備のため自分一人でもわりました。また調査結果もKJ法¹⁹を用いて整理し、全体の報告書も担当しました。年末年始も返上して執筆に力を入れて、400字で200枚近く書きました。このプロジェクトを機に、山澤先生から日本国際問題研究所をご紹介いただき、政治学や国際関係など他の分野の学者との交流もはじまりました。

このように、どんな誘いにも応じて多様な経験を積んだことが、その後の研究や教育につながっていきました。自動車産業や繊維産業のプロジェクトでの経験は、中小企業研究をする際にも、大いに役に立ちました。

弘中 東南アジアの研究に本格的に力をいれたのは、南山大学時代からですか。

足立 開発経済学を担当するからには、途上国での長期滞在経験が欠かせないと考えていました。そこで1982年から1983年にかけて、一橋大学の後輩が教鞭をとっていたタイのタマサート大学に在外研究で滞在しました。在外研究というものの、経済学部の大学院英語修士課程で日本の経済発展論の授業を2学期にわたって

担当しました。そのときに、アジアの経済発展を日本人が教えることには大きな意義があると気づきました。例えばヨーロッパの教科書ではアフリカが、アメリカの教科書ではラテンアメリカが取り上げられることが多いのです。日本人が教えることにより、アジアに焦点を当てることができます。

タマサート大学滞在中は、タイの全土を回る機会にも恵まれました。タイの文部省が地方の高校教員を育成する事業を行なっていて、タマサート大学の経済学部の先生たちが講義にでかけるのです。そこに同行してタイの全土を巡りました。

4 教育への情熱

弘中 南山大学での勤務はいかがでしたか。

足立 赴任後は、教育者としての意識がかなり強くなりました。アメリカ留学時に、大学の教育の質の高さに影響を受けたというのがあります。また大学時代に友人が「足立は教師に向いているな」と言ってくれたことも印象に残っていました。

授業の準備のために、経済発展論の先駆的教科書だったキンドゥルバーガーの『経済発展論』²⁰を熟読し、さらに参考文献に上がっている論文も片っ端から読んでいきました。渡辺利夫先生²¹が若手研究者と共訳したエルカンの『開発経済学』²²も教科書として使いました。誤訳・誤字・ミスプリなどを数十か所発見して渡

18 やまざわ いっぺい (1937年-2018年)。元一橋大学教授。『日本の経済発展と国際分業』(東洋経済新報社)などの著作がある。

19 文化人類学者の川喜田二郎氏によって考案された、発想を整理する方法。

20 Kindleberger, C.P. (1958) *Economic Development*. New York: McGraw-Hill (坂本二郎・加野英資・菅宣雄訳 (1969)『経済発展論 (上) (下)』好学社)

21 わたなべ としお (1939年-)。元東京工業大学教授、元拓殖大学総長。専門は開発経済学で、『成長のアジア・停滞のアジア』(講談社)などの著作がある。

22 Elkan, W. (1974) *An Introduction to Development Economics*. Penguin (渡辺利夫・他訳 (1976)『開発経済学』文真堂)

辺先生に手紙をさしあげたところ、大変感謝してくださり、後に一緒に教科書を書くというご縁が生まれました。

弘中 南山大学時代には、学生を東南アジアに引率したこともあるとか。

足立 1977年に総理府の「東南アジア青年の船」に団員として参加し、1987年には団長となりました。現在の秋篠宮紀子妃も学習院の学生として参加されていました。

また名古屋大学・南山大学のAIESECの学生たちを香港・シンガポールまで研修旅行に連れて行ったり、南山大学の同僚と共に学生をタイ・マレーシア・シンガポール・フィリピンなどに引率したりしていました。

弘中 1989年に名古屋大学に移られますね。

足立 繊維産業の調査を指導してくださった瀧澤先生の誘いです。私が力を注いだ報告書を評価してくれたようでした。



瀧澤先生は名古屋大学でゼミ教育に熱心にとりくまれており、ゼミナールの運営を学びました。発表を担当する学生はB4サイズの罫紙に10枚以上のレポートを書いてきて、それをもとにディスカッションをします。学生は報告者・議長・書記・コメンテーターなどを分担します。時間も長いのです。1時から3時過ぎまでやるといったん休憩をして、軽食を近くの店から調達し、後半は飲食可で、議論が終わるまで徹底してやっていました。

5 中小企業研究との関わり

弘中 名古屋大学時代から、中小企業研究への関わりが深くなっていったのでしょうか。

足立 日本中小企業学会には、南山大学時代に中村精先生²³の誘いで会員になっていたのが会員歴は長いのです。事務局長も6年間つとめました。日本経済政策学会、アジア政経学会とならんで、中小企業学会での活動を活発に行っていました。

名古屋大学時代には、国際中小企業会議（International Small Business Congress）のサンパウロ・台北・ジャカルタ・ソウルでの大会に参加し、多くの発言機会を与えられました。また瀧澤先生からの誘いで日本学術振興会産業構造・中小企業第118委員会にも参加するようになりました。

当時はプラザ合意による円高があり、日本の中小企業の国際化が急速に進んだ時期です。プロダクト・ライフサイクルにも注目があつま

23 なかむら つとむ（1916年-1991年）。元南山大学教授。『中小企業と大企業—日本の産業発展と準垂直的統合』（東洋経済新報社）などの著作がある。

り、ASEANの輸出志向工業化が本格的に始まった時期でもあります。私は中小企業の国際化対応を体系的に整理したいと考えていました。

この頃に力を入れていたテーマは、「国際通貨調整下のアジア経済」²⁴「我が国中小企業のアジア進出」²⁵「援助・貿易・投資の三位一体の経済協力」²⁶です。相変わらずフィールドワークを続けており、実際の現場をみる現地現物を重視しました。また、「大企業と中小企業との違いは何なのか」「中小企業研究の方法はどうあるべきなのか」といった根本的な課題や概念について、多様な研究者との交流から学ぶ機会を得ました。そして、1999年の中小企業基本法の改正を機に、中小企業政策は社会政策と経済政策の両面を持つことを強く意識するようになりました。

弘中 名古屋大学では新設された国際開発研究科も兼担なさっていますね。

足立 経済学部・経済学研究科の授業とは別に、国際開発研究科で英語での講義を担当していました。そこでは、フィールドワークの経験と東南アジアでの自身の体験をふまえて講義をしました。

またこの頃は、渡辺利夫先生と『図説アジア経済』²⁷を執筆しました。よい入門書は若手研究者の育成に欠かせないと考えていましたから。学外でも、アジアからきた研修生を対象に

日本の企業がアジア進出で直面する課題を講義したり、ユーゴスラビアに行ってボランティア講義をしたりといった活動も行っていました。

弘中 1997年から金城学院大学に移られます。

足立 同学院に勤務する幼馴染から、新設学部をつくるための協力を依頼され、国際化・情報化・福祉社会化を三本の柱とする現代文化学部の理念に共感したのです。

弘中 金城学院大学での教員生活はいかがでしたか。

足立 相変わらず教育に力を入れていました。新たな教科書として、経済開発から人間開発への流れをとらえた『人間開発報告書を読む』²⁸を執筆しました。その中で紹介したMDGs (Millennium Development Goals) は、今のSDGs (Sustainable Development Goals) の先駆けとなった目標です。

大学のゼミでは1,000ページもある教科書²⁹を使用していましたが、卒業生たちは「厳しいがこのゼミに入ってよかった」と評価してくれました。退職するときになって気づいたのですが、165人のゼミ生のうち154人が第一志望で入ってきていたのです。

若いうちに海外に触れてほしいと強く考えていたので、ゼミ学生には留学を勧めると同時に、希望者を募って、再び海外に研修に連れていく

24 足立文彦 (1990)「円高対応過程における東南アジア直接投資と中小企業」日本中小企業学会編『世界の中の日本中小企業』日本中小企業学会論集第9巻 同友館、足立文彦 (1991)「日本企業の国際通貨調整に対する対応と中小企業研究の課題」『中小企業季報』第2号 通巻78号、足立文彦 (1991)「国際通貨調整下のアジア経済とわが国中小企業のアジア進出」『中小企業金融公庫月報』1991年8・9月号など。

25 足立文彦 (1994)「中小企業のアジア進出—成功の条件と失敗の原因—」『商工金融』第44巻第7号など。

26 足立文彦 (1993)「日本の対アジア経済協力：三位一体の段階論」1993年11月『ジェトロセンサー』11月号

27 渡辺利夫・足立文彦 (1992)『図説アジア経済』日本評論社

28 足立文彦 (2006)『人間開発報告書を読む』古今書院

29 Todaro, M.P. (1997) *Economic Development*, Addison Wesley Longman (岡田靖夫監訳 (1997)『M・トダロの開発経済学』国際協力出版会)



知事が執筆した『地方からの発想』³⁰が目にとまりました。一村一品運動は、アジアの途上国で普及しつつあり、海外からの要人も大分県に視察に訪れるようになっていました。

名古屋の国際連合地域開発センターの仕事で知り合った日本開発銀行の牧野光朗さん³¹という友人がいて、

ようになりました。若いうちに海外を体験することで将来が変わることもあるし、社会人になっても必ず生きてくるものです。教員にとっては、学生を海外に引率するのは負担が大きいのですが、学生の変化を見ると喜びも大きいのです。私自身はタイ語の日常会話ができるため、まずタイへの研修を企画し、その後シンガポールなどにも発展させました。こうした活動は、その後の金城学院大学とタイのパヤップ大学との交流協定に発展しました。

当時大分事務所長をしていたことから、一村一品運動に関連している何人かをご紹介いただき調査を開始しました。その後、徐々にネットワークが広がり、フィールドワークの対象は運動のモデルとなった大山町や湯布院だけでなく、県内各地の運動のリーダーや生産者グループ、女性起業家など広範囲に及びました。このテーマは開発経済学での内発的発展という視点と、自身が持つアジアへの関心とが結びついた研究となりました。

弘中 一村一品運動に関するご研究は、この頃はじめたのですか。

足立 金城学院大学での1997年から2015年の在任中、9年間は国際交流センター長、教務部長、学部長と多くの役職をつとめていました。多忙で海外フィールドワークに行くことが難しくなり、国内をフィールドとして何かアジアに役立つ研究はできないかと考えていたのです。

ある日、書店で偶然に、当時の平松守彦大分県

弘中 運動の創始者である平松氏からも直接お話を聞いたのですか。

足立 『商工金融』の巻頭言に一村一品運動のことを書いて平松さんに送ったところ、すぐに平松さんから「徹底的に調査をやらないか」と言う返事がきました。

平松さんは4年ぐらい前に亡くなられたのですが、私が大分を訪問するたびに挨拶に行くときいつも喜んで話をしてくれました。タイの共同

30 平松守彦（1990）『地方からの発想』（岩波書店）

31 まきの みつお（1961年～）日本開発銀行（現在の日本政策投資銀行）フランクフルト事務所長、大分事務所長を経たのち、2004年から長野県飯田市長。



研究者を連れていった時も一席設けてくれたりしました。

一村一品運動の研究に関してはアジアへの展開も踏まえていくつかの論文を書いています³²、今後著書としてまとめなくてはと考えています。

弘中 金城学院を定年退職になったあとは、アジア各国で、英語によるボランティア講義に力を入れていらっしゃいますね。航空券はすべて自費、ときには宿泊費も負担して、ボランティア講義を行うとお聞きしたときには、びっくりしました。

足立 金城学院大学に勤務していたころ、IATSS (International Association of Traffic and Safety Sciences) フォーラム³³や、海外技術者研修協会³⁴で、アジアからの研修生向けの講義をやっていました。そのときに感じたのは、日本への関心の高さです。日本が黙っていれば、

日本のプレゼンスはますます下がっていきます。日本にはまだ貢献できる部分が多くあるのです。東南アジアの研究をしてきて、東南アジアの人たちにお世話になってきたので、何か恩返しをしたいという気持ちもずっとありました。また日本政府の「東南アジア青年の船」の活動や、学生の研修旅行の引率、海外からの研修生・留学生の指導など、人材育成に関わってきた経験も活かせると考えました。

これまで海外の大学の客員教授をつとめてきたり、学会活動や調査活動でアジアの大学や研究者とのネットワークを築いてきたので、今もそこから講義の依頼がきています。

弘中 どのような内容を講義するのですか。

足立 2単位相当の「開発経済学と日本の経験」に加えて、独立したトピックとして「日本の近代化とアジア」、「アジアと日本の中小企業」、「大分県の一村一品運動」、「アジアと日本のリーダーとリーダーシップ」などが主で、先方からのリクエストにも応えます。また、受講生の反応や関心をみながら、どんどん改善してしていきます。最近では岩倉遣欧使節団や戦災や自然災害から立ち直った日本のレジリエンス（強靱性）などのストーリーもとりにまぜています。

講義資料については、コアとなる文献の要約に加えて、新聞や雑誌・インターネットからのデータや情報をアップデートしつつ、自分自身

32 足立文彦（2004）「一村一品運動と現代アジア—大分県と北タイ地域の現地調査から—」日本中小企業学会編『アジア新時代の中小企業』日本中小企業学会論集第23巻 同友館、足立文彦（2006）「一村一品運動と地域経済の自立」『商工金融』第56巻 第8号、足立文彦（2009）「一村一品運動の統計的検証」日本中小企業学会編『中小企業と地域再生』日本中小企業学会論集第28巻 同友館、足立文彦（2015）「一村一品運動研究の回顧と展望」金城学院大学論集社会科学編第11巻第2号、など。

33 1985年に本田技研工業株式会社の創業者である本田宗一郎氏と藤沢武夫氏の個人基金で設立された研修機関でアジアの将来を担う人材の育成を目指している。

34 現在の財団法人海外産業人材育成協会。2012年に財団法人海外技術者研修協会と財団法人海外貿易開発協会が合併した。

の知見と研究成果を加えたオリジナルなものにしています。これまでの国際会議での経験を活かして伝え方も工夫し、ビジュアル的にわかりやすい講義資料作りを心がけています。

弘中 先生がアメリカに留学したのは大学時代の一年だけですね。なぜそのように英語が堪能なのですか。

足立 英語力については、常にメンテナンスを心がけてきました。海外になかなか行けないときには、英語力が落ちてしまいます。そこで、通勤中は車の中で、家では、居間、浴室、トイレにCDプレーヤーを置いて、ずっとリスニングしていました。内容はスミスの「国富論」、フリードマンの「選択の自由」、ドラッカーの「マネジメント」などの専門に近いものから、「大草原の小さな家」、「アンデルセン童話」、「聖書」、デール・カーネギーやナポレオン・ヒルの人生論といったものまで様々です。

弘中 インタビューも終わりに近づいてきました。若い研究者たちにアドバイスがありましたらお願いします。

足立 研究者もどんどん外に出て行ってほしいですね。外というのは3つあります。一つは学際性です。自分の比較優位を意識しつつ、他の分野の専門家とも積極的に議論してほしいです。第二が国際性。どんどん海外に出て調査・研究交流してほしいです。その際に、単に進出している日本企業にインタビュー調査するだけでなく、地元の企業や政府の政策にどのような示唆が与えられるかまで考えてほしいと思います。

す。第三が学会以外の方々との異業種交流です。産業界との交流からは現地現物を学び、政策担当者にはエビデンス・ベースの提言をすべきです。

弘中 研究時間の捻出について何かご示唆はありますか。

足立 自分自身は、いわゆる「雑用」と言われるようなものを人よりも多く引き受けつつ研究・教育・国際交流の三位一体のバランスをとるようにしてきました。結果的には教育者の使命にやや重点が置かれた形になりましたが。

確かに大学の研究環境が厳しくなっていますから、理想とする体制はまず得られないと考えたほうがよいでしょうね。そうした困難の中では、長期的な目標を意識してモチベーションを高く保ち努力するしかないでしょう。さらに与えられた機会は期待に応えるべく努力して、その成果を骨肉として次に活かしていく姿勢も求められるでしょうね。

弘中 本日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。

〈インタビュアー略歴〉

弘中史子（ひろなか ちかこ）

中京大学総合政策学部教授。博士（経済学）。滋賀大学経済学部教授を経て、2020年より現職。専門は中小企業の技術マネジメント。近年は中小企業のアジアでの海外生産に関心を持っている。